

防災・減災

【活動内容・実績】

① 福祉避難所へのインタビュー&GIS（地理的情報システム）を使用して、「要配慮者」の人数と福祉避難所の受け入れ可能人数を可視化し、福祉避難所を増やす取り組みを行う。

② 災害時要配慮者の現状についてシナリオを作成し、劇を上演する。劇を通して災害時要配慮者が災害時にどういうことで困っているのか、どう支援していけばいいのかを地域住民に伝えるために、シナリオを考え、朗読劇で訴えるというものだ。シナリオを考えるにあたって2011年3月11日障害者の状況と支援者の活動を描く劇映画「星に語りて～Starry Sky～」を鑑賞したり、障がい者団体の親の会にインタビューにいたり、文献にあたった。また「FM尼崎出演」災害時要配慮者の苦悩・支援の大切さを訴える。（R2.12.14）

【劇のシナリオの一部】

「一度目の避難の時には、体育館で、避難住民から、罵声をあびせられました。一郎君のことを知らない、また自閉症という障がいの特性を知らない場合、ある意味、あのような罵声をあびせられても仕方がないことかもしれません。各障害の特性、障害者が必要としている支援や適切な接し方などのガイドブックが数多く発行され、行政も啓発活動を行い、学校教育においても障がいのある人について多くのことを学んでいます。しかし、身近にいない、知ろうとしないなど、自分事を感じることができないため、学んだことが自分のものにならないのだらうと思われれます。高齢者は将来の私です。障がい者は将来、もしかしたらなるであろう私です。想像力を働かせることで、自分事としてとらえることができるのではないのでしょうか。これを機会に各障がいの特性や障がいのある人が必要としている支援や適切な接し方を身につけてほしいと思います。」「福祉避難所に行く手順なんて全然知らなかったわ。この手順を普段からシュミレーションしておくことが大事やね。避難行動要支援名簿に登録しておくことはもちろん、ご近所さんと平素から顔の見える関係をつくっておくことも必要やね。支援者になにかがあって助けにきてもらえない場合に頼れるのはやはりご近所さんやからね。」

③ 高校生、大学生に災害時要配慮者の問題について知らせる活動。

災害時要配慮者の取組について報告 ⇒ R2.11.8 兵庫県防災ジュニアリーダー、R2.11.22 SSH環境サミット、R2.12.23 甲南大学リサーチフェス、R2.12.26 SSH京都大学オンライン

④ 地域イベントにおいて、防災クイズ、段ボールベッド、トイレ、マスクづくり、毛布担架、三角巾など

子ども向けのイベント「遊ぼう！学ぼう！小田夏祭り（R2.8.23）、学校で体験！防災スクール IN 杭瀬小学校（R2.11.7）、「あまおだ減災フェスティバル」の開催（R2.11.14）、高齢者の方向けのイベント「話して元気 学んで知識 地域つながりフェスタ 秋」（R2.11.23）、「防災出前授業 IN 立花西小学校」（R2.12.23）、



【想定していた活動成果に対する達成度合い（達成できたこと、できなかったこと等）、学生等が関わった地域、団体の活動の変化等・学生等の学習意欲、地域に対する考え方の変化等】

「どのように地域に関わることができるのか全く知らず、あまり関心がなかった。また、地域コミュニティの大切さについてもほとんど理解していなかった。しかし、活動を通し、地域コミュニティや互近所の大切さを理解することができ、地域との関係を大切にしなければならぬと感じた。」

「福祉避難所の数を増やすことが難しいとわかってからは災害時要配慮者について地域住民へのより一層の理解を促すことが必要だと思えるようになった。それを踏まえた上で本格的に劇のシナリオを作成した。」

「練習を始めた頃はみんな棒読みと早口だったが、毎日読み合わせをすることで、読むだけの劇が人に伝える劇に変わっていった。本番は朝からリハーサルを行い、立ち位置や声の大きさなど細かいことをギリギリまで確認した。劇が始まるとあっという間で気づいたら終わっていた。家に帰ると達成感を感じ始めた。」

「障害者団体の方、おやごさんとの話し合いでは、私たちが考えていた以上に災害が起きた際、日常生活の苦労があることを聞くことができた。特に印象に残ったのは、避難所に入ることができず避難所で避難ができなかったりという話だ。災害時はみんな自分のことを一番に考えがちですが、少しでも誰かが配慮すれば、避難所で生活できたかもしれないと思うと、やはり地域との繋がりを持っておくことや、障がいについて知ってもらっていることは大切なのかなと思った。」

「自分の力だけで避難することが難しい「災害時要配慮者」の存在を知り簡単なことではないと思った。だから私たち高校生や若者が防災・減災における課題や問題点を学び、それを多くの人に伝えていくことで地域の活性化にも繋がっていくので、これまでの活動は続けていくべきだと思う。人と防災未来センターに行った時は過去に日本で起きた地震や津波による被害についてや、災害後の大変な中で人々がどのようなことをしたり考えたりしていたのかが分かった。災害について深く考える良い機会になった。」

コロナ禍の影響にもかかわらず、地域のイベントについては、昨年度よりも積極的にすることができた。

高校生から、地域に向けて、平時からの顔の見える関係づくり、その延長線上に災害時の共助の関係を築き上げようと発信をしてきた。高校生が発信することで少しずつではあるが、「防災・減災」の取り組みに関心を持つ地域住民の方が増えてきたという実感はある。4月以降も引き続き、創意工夫をしながら、後輩に引き継ぎ、取り組んでいきたい。

在宅療養・看取り

【活動内容・実績】

「病院から在宅へ—在宅療養・看取りを地域社会・在宅で」「尼崎市介護・医療連携協議会」（尼崎市包括支援担当が事務局）の医療・福祉の専門職から「高齢社会の現状」「地域包括ケアシステム」「多職種連携の大切さ」を学ぶことを通して、「医療や介護が必要になっても、住み慣れた地域・自宅で、最期まで自分らしい生活を送ることができるということ」を地域住民に伝えることを目的に、実施。「高齢社会の現状」「地域包括ケアシステムについて」「多職種連携の大切さ」についてはパワーポイントを作成し、「住み慣れた地域・自宅で、最期まで自分らしい生活を送ることができるということ」についてはシナリオを作成し、劇を通して地域住民に伝えた。「探究応用生徒報告会」（R3.1.23）と「在宅療養ワークショップ」（R3.2.6）において。





在宅療養・看取りの授業「在宅医・訪問看護師」の役割 ()



【想定していた活動成果に対する達成度合い（達成できたこと、できなかったこと等）、学生等が関わった地域、団体の活動の変化等・学生等の学習意欲、地域に対する考え方の変化等】

【劇のシナリオの一部】

医師：今回のように、本人を人として尊重した意思決定の実現を支援することをACP（アドヴァンス・ケア・プランニング）といいます。このように高齢者や重い病気にかかった残された時間をどのように過ごしたいのか、どのように死を迎えたいのか、いわゆる、もしもの時どうするか以外にも、価値観や信念、死生観、人生観、療養の場や最期の場所に関する思考、代弁者についても話し合います。厚生労働省は2018年9月、「ACP(アドヴァンス・ケア・プランニング)」の愛称を「人生会議」に決定しました。また、11月30日(いい看取り)を「人生会議の日」とし、人生の最終段階における医療・ケアについて考える日とすることも決まりました。劇の中であったように、本人と家族、医療・ケアチームと繰り返して話し合うことが必要となります。私たちが万が

一に備え、自分の人生を見つめ直すためにもACPを行う必要があります。皆さんもご家族や自分のことをよく知っていて信頼できる人と一緒にこれからのことを考えていってください。最後になりましたが、患者さんが経済的負担や家族の介護の負担に配慮することなく、自己の人生観に従って真に自由意志に基づいて決定できるためには終末期における医療・介護・福祉の体制が十分に整備されていることが必要で、かつ患者の意思決定をサポートする体制が不可欠であることを伝えたいと思います。それらが整備されないと、お金がないから、家族に迷惑をかけたくないからと、本人の意思を本当に尊重することにならないからです。

「授業で毎回行うグループワークは考えるテーマがとても難しく、自分の意見が出せなかった。しかし、毎回考えることで少しずつ考える力が身に付き、自分の意見を出せるようになった。また、自分の意見とは逆の意見などが出た時、相手が何故そう思ったのかを聞き、また、自分が何故そう考えたのかを相手に伝えることもできたので大きく成長できた。私は人前で話すことが好きではなく、また得意でもないのでもいつも発表などは、避けられる時は避けていた。しかし、グループでまとめたことを発表する時順番に発表していくと、どうしても自分が発表しなければ行けない時があり、何度か発表していると、やはり好きにはなれないが、普通に発表できるようになった。」

「私自身劇は初めてで何からすればいいのか分からなかった。セリフだけを練習すればいいのか、動きと合わせて覚えればいいのか、何一つ分からなかった。劇のシナリオも、一度完成したと思っても訂正をする、その繰り返しだった。練習をしていく中でできない事だらけでもう辞めてしまいたいと何度も思ったが、一緒に練習をしている仲間が声を掛けてくれて頑張ろうと思えた。それでも劇が完成するまで時間がかかった。一人一人の意見が違い、険悪な雰囲気になったこともあったが、放課後だけでなく、昼休みや日曜日に学校に来て練習を行う事で納得のいく劇へと仕上げる事ができた。劇の練習だけでなく、衣装や小道具、大道具の準備もあり分担して行うことが大切だった。上手く分担することができず、同じ人が色々と仕事を抱えている状態になってしまった事は反省点だと思う」

「一番印象に残っている講義は、『最期をどう過ごしたいか』について考えたものだ。『まだ若いからいいや』ではなく、明日、何があってもおかしくないと考え、今から少しずつ自分は『どのように最期を迎えたいのか』を考えるきっかけとなった」「初めて『もしバナゲーム』を体験した時は、カードに書かれたことの内容が理解できず曖昧ながら、ゲームを進めていました。しかし、『在宅療養ワークショップ』で行った『もしバナゲーム』では全てのカードに対して理解が深まっており、自信を持って進めることができた。この1年間の講義の成果だと思った。」

子どもの居場所作り

【活動内容・実績】

8月23日「遊ぼう！学ぼう！小田夏祭り」でのブース担当、10月17日の地元のアミシング潮江商店街「楽市楽座」11月1日の「SDGs in ODA」（小田南生涯学習プラザ）では、人形劇や〇×ゲームなど子どもたちが楽しめる要素を入れて、交通ルールと障がいを持つ人への



理解を身近に考えてもらうブースをもった。「SDGs in ODA」に参加していた子どもの保護者から、不登校のことについて、本人は行きたいと思っているのに行くことができないという話を聞き、「私たち高校生には何かできないのか」と不登校の子ども支援活動をしている尼崎市の施設「いくしあ」に行き、聞き取りを始めた。子どもたちは、家族との関係でも、学校に対してもいろいろな悩み・生きづらさを抱えているということがわかった。子どもたちに学校での様子や学校生活の現状を聞き、聞いたことをもとに子どもたちに安心できる居場所づくりができないだろうか考えるようになった。コロナ禍だからこそ、居場所は必要だということで、3月25日に「おねえちゃんといっしょ ほっとできる場でほっとしよう」ということで小学校低学年向けに紙芝居、昔遊び、ダイナミックアートを通して楽しみながら、子どもの声を聞こうというイベントを実施した。この「子どもの居場所作り」について、特に小学校高学年、中学生に対して、高校生にできることなんてあるのか、行政や



若者の支援を行っている NPO 法人などと連携しながら、2021 年 4 月から本格的に取り組んでいこうと考えている。

【想定していた活動成果に対する達成度合い（達成できたこと、できなかったこと等）、学生等が関わった地域、団体の活動の変化等・学生等の学習意欲、地域に対する考え方の変化等】

「子どもにとって大人は少し怖い存在であると思います。私も小さい頃は知らない大人は怒る人というどうしても怖いイメージがあったのですが、高校生・大学生のお兄ちゃんお姉ちゃんは遊んでくれる人というイメージがあり、話しかけやすいと思っていました。だから、大人よりも歳が

近い高校生である私たちが子どもと関わることで、大人とのハブになるのでは無いかと思います。大人と子どもの間である私達だからこそ、悩み事などを大人の考えも子どもの考えもどちらも踏まえつつ解決に導く事が出来るのでは無いかと思います。

居場所づくりはパワーポイントにもあったようにサードプレイス、教室の一室で少人数でお菓子を食べたり、お絵描きしたり、勉強したりなど、自分がしたいことを自由に行えるような本当に家みたいで落ち着くことが出来るような場所にしたいと考えています。子ども食堂もしてみたいと思っており、ただ作られたものを食べるだけでなく、メニューを一緒に考えて、一緒に作るという形もしてみたいです。少人数だからこそ落ち着いた雰囲気になり、気分転換になったり、気兼ねなく話をする事が出来たり、話をする事で気持ちが楽になったり、元気になってまた来たいなと思ってもらえればと思います。また、子どもだけでなくその親御さんも来たいと思えるような場所にしたいです。」

「地域包括ケアシステムやアドバンス・ケア・プランニング、災害時要配慮者、子どもの不登校の問題など、ひとつひとつの講義や研究が私にとって知らなかった事をどんどん知ることが出来て楽しかったのと同時に、こんなに深刻な問題があるのに今まで何も知らずに過ごして来た事に後ろめたさを感じました。さらに、知識の面だけではなく、様々な活動を通してコミュニケーションをとったり自分達で考えて行動することができるようになったり、仲間同士で励ましあって様々なことを乗り越えて人としてもとても成長出来た1年だったのではないかと思います。」

「子どもの居場所づくりは、よりいっそう大切なものであり、解決しなければならない課題であるということがわかりました。なぜこのことが地域の課題であり、解決しなければいけないのかということ、この頃増加している不登校問題を改善することができるかもしれないからです。不登校の状況にある子どもは、学校に行きたいけど行けないといった状況にあるケースが多くみられ、そのような子どもが少しでも学校に行きやすくなるような環境を作らなければ今後もそのような不登校の子どもも増えていくのではないかと思います。不登校になった子どもや、不登校になりそうな子どもが少しでも前向きに生活をおくれるよう、心のよりどころを作ったり、はげ口になってあげるなど、そのように居場所を少しずつ作ってあげることにより、不登校問題が改善できるのではないかと私は考えています。

さらに、私はこれまでの子ども班の活動で学んだことを通して、今後は残りの子ども班で活動をするのできる期間を使って、3/25に子どもイベントを開催し、そこではさまざまな子どもに寄り添える場、すなわち私たち子ども班の目的の一つでもある『サードプレイス』のための基盤を作っていくと考えています。そして、このイベントやこれまで行ってきた活動などでの発見や反省点、加えて作成した紙芝居などについて次の代

の子ども班の方々に少しでも多くのことをデータなどで残していきたいと考えています。

また、この子ども班として過ごした約一年間、私は班の中で副班長という役割で活動を行っていたのですが、当初は種類の活動に対して優先順位が低くなっており、あまり活動に参加ができなかったため、他の班員にたくさんの迷惑をかけてしまっていた状態でした。さらに、小田夏祭りでは当日近くまで自分が駄菓子屋のリーダーであるということもわかっていない状態で、そこでもたくさんの人に迷惑をかけてしまっていました。それらのことから、活動において自分のすべきことや役割について自覚を持ち始め、どちらでも無事に果たすことができました。また、反省点より後半の活動では積極的に一生懸命取り組み、自分の役割に沿ってできたのではないかと思います。」

「私は、なぜ子どもの居場所作りが地域課題になるのかと考えた時に地域の子どもというのは地域の大人たちで育てていくものという考えがあるからではないかと思いました。その理由は、私のイメージですが昔から地域の子どもは近所で顔見知りや知り合いという認識があり、地域で見守られながら成長していく。またその子どもたちが大人になった時に同じように地域の子どもたちを見守るのではないかと思います。だから子どもたちが安心できない地域ならば安心できるように地域の大人たちが改善していく必要があるし、ハブとして中間地点にいる高校生が地域の人や子ども達が安心できる居場所のために動く必要があると思いました。これらのことから居場所作りが地域課題になっていると思います。」

子どもの居場所作りや地域活性化について研究や活動を行って、私1人だけにできることはほとんどないですがその中でもできることを卒業しても行っていきたいと思いました。不登校問題については「いくしあ」への訪問をして、不登校は誰がなってもおかしくないということをお聞きしました。しかし現状の学校や一般教師、生徒の考えは「不登校になるのはおかしい」という感じの意見が多いと思いました。このことからまずはこの考えを捨てて、不登校になる可能性を自分事として考えてもらえるように不登校になってしまう理由などの現状を知ってもらいたい。そのために今までしてきた活動やこれからしていく活動の主旨を周りの大人や地域の人知ってもらうことから始めたいです。また高校卒業後は私が大きな居場所を作るのは難しいと思うので、ハートフルフレンドに登録をしたり、子ども食堂のボランティアなど子どもたちと関わる事で少しでも地域に安心できる居場所を提供する手伝いを行いたいです。」

「子ども班として「子どもの居場所づくり」をテーマにたくさんの活動に取り組んできました。私たちは、今まで学校という教育の場でたくさんのことを学び、たくさんの人と関わってきました。その中で、クラスに不登校の子どもが多かったということが分かりました。そこから、どうすれば不登校のような子どもたちを救えるのか、どんな理由で不登校になる子が多いのか気になり、調べ始めました。いくしあという不登校の子どもたちの支援をしている施設にお話を聞きに行ったことで、不登校の子どもたちの現状や、居場所がない子どもたちがいたり、たくさんの課題がありました。こういった課題が解決されなければ、これから先どんどん不登校の子どもたちが増え、小中高生の自殺者数も増えていくことが考えられました。これらを踏まえ、私たち子ども班で考えたものが、「子どもの居場所づくり」です。子どもの居場所を作ることは簡単なことではありません。しかし、「いくしあ」に訪問したり、自分たちでたくさんのお話を調べてきました。その上で今できることとして考えたのが、実際に不登校の子どもたちとお話をする機会を設けるということです。学校ではない、地域の施設をお借りし、日常会話を交わしたり、安心して過ごせる居場所を子どもたちに提供できればと考えています。」

「この一年間、尼崎市の子どもについての取り組みを考えてきて子どもへの居場所づくりの大切さを理解することができたと思います。今年は子ども班が二年目で昨年度先輩方が準備してきたこども食堂を実施する予定でしたがコロナ禍のため頓挫してしまい、実際に子どもたちに会えたのは8月23日の夏祭りでした。私は保護者の方とはお話ししなかったのですが、班員の子がお話を聞いていて保護者の方から不登校の子供についてのお話を聞いたといっていました。その時に私は「普通に学校に行っている子どもたちのほかにも引きこもりや不登校の子どもたちとも触れ合っていかなければならない」と思いました。尼崎市に不登校などに理由で支援を受けられる施設があるとその時に初めて知りました。その施設に行くためにみんなで質問を考え、代表者が施設を訪問しました。施設訪問後、代表者たちから話を聞くと私たちが今やっているイベントはたくさんの人に来てほしいと思っているため、不登校の子どもたちには不向きだとわかりました。話し合いの中で、ほっとする場所を私たちが作っていけないのかという話になりました。私たちがこれからしていくことは、地域の中に「安心できる居場所」を作っていくことだと考えています。不登校の子どもたちが安心して過ごせるように支えていくことだと思います。といっても私たちがまだ子どもなので、行政や学校の力を借りて活動を続けていきたいと思っています。」